『地図を持たない旅人』―― 蕭乾と中国作家の運命

TRAVELLER WITHOUT A MAP

"Fate of XiaoQian and the Chinese Writers"

顧　　偉　良

Gu Weiliang

「神聖にして犯すべからざる確信の上に
建てられた世界においては、小説は死ぬ。」
――ミラン・クンデラ

プロローグ

二十世紀の中国現代文学は、前途多難の道を歩み、過去に幾度も厳しい試練に直面した。特に建国後の度重なる政治運動に見舞われ、数え切れない程の文学者は、残酷な政治的迫害から免れなかった。幸いに生き残ったものは、精神面で大きな打撃を受け、立ち直れないものも多数いた。蕭乾は、「中国の知識人の一生は、みな一冊の本になる」と言っている。それは、中国の知識人が激動と苦難を生き延びることを意味している。中国現代文学の抱えている問題は、勿論単なる文学者だけのことでなく、中国社会の縮図そのものである。この縮図の中に無数の断絶が横たわっている。それは多かれ少なかれ、悲劇が殆どの中国人家庭に襲いかかったのである。その痛みは無数の中国人の心に刺されている。

これまで中国における蕭乾研究は、『蕭乾研究資料』（1988）、『蕭乾研究専集』（1992）の他に、数冊の伝記があるだけである。新作『水底的火焰――知識分子蕭乾：1949-1999』（丁亜平著、中国人民大学出版社、2010）があるが、その中で蕭乾帰国後の仕事、家庭生活および著者自身と蕭乾との個人的交流に触れるに止まっており、肝心な知識人の問題に関する思想面での検証は一切行われていない。一方、日本では故丸山昇氏による蕭乾研究「中国知識人の選択――蕭乾の場合」（1988）、続編「建国前夜の文化界の一断面――〈中国知識人の選択――蕭乾の場合〉補遺」（1990）があるほかに、蕭乾に関する研究はまだ少ない。丸山昇氏は、建国前後の文学史角度から蕭乾の文学思想を検証した。

蕭乾（しょうけん）の思想の根柢には、民主主義に基づき個人の権利を尊重する思想が流れているが、それが政府当局のイデオロギーとは相容れないものである。そのため、中国国内での蕭乾研究は、厳しい局面に直面している。数年前、筆者は蕭乾夫人文潔若氏の訪問で蕭乾文学と出会い、特に『地図を持たない旅人』をめぐって考え続けてきた。一人の男の波乱万丈の人生を描いたこの作品は、海外では「中国の〈オデッセイ〉」と譬えられている。作品の記述が内包しているダイナミックな構造は、これまでの中国の文学よりほかにない複雑さで、新たな文学の変容を孕んでいる。

本稿では、毛沢東時代における文学の状況をめぐって、ソビエトの文学状況および建国前夜に香港で起きた文芸論争を踏まえながら、翻弄された蕭乾の人生と文学を考えてみる。

一、生産者としての〈作者〉

ある種の文学の選択により、必ずある種の文学の運命がある。中国現代文学は、不幸にして個別の全集を除けば、殆どの作家や詩人の全集に創作の空白が残されている。今後、どんな中国現代文学史が記されたにしても、その空白を永遠に埋めることはできないだろう。

毛沢東時代における文学の状況を見る場合、奇妙にもある共通性がある。すなわち、ソビエトにおける文学の状況はそれに当たる。ここで、ドイツの思想家ベンヤミンが書いたエッセイ「ロシアにおける新しい文学」（1927）の中で紹介された

十月革命後の文学状況について見てみよう（抜粋）。

《著作物における新しい時代、潮流を、その直前の文学的状況から説明するという習慣は、文学史的研究に由来している。（略）いまロシアに出現してきつつある著作物を、ドストエフスキー（1821–81年、ロシアの作家）やトゥルゲーネフ（1818–83年、ロシアの作家）やトルストイ（1828–1910年、ロシアの作家）の世代が生み出した文学からの展開として説明するのは、少なくとも回り道だ、ということである。この新しい著作物を特徴づけようとする作業の当を得た出発点とは、革命とともに姿を現わした、変化した文化状況なのだ。

革命の勃発時における状況。新しい文学および新しい芸術全般をめぐる最初のもろもろの努力は、プロレタリア礼賛の旗のもとに集結している。指導的な位置にいるのは、まず第一に、マヤコフスキー（1892–1930年、ロシア〔ソ連〕の詩人）である。（略）

一億五千万の人間から成る民族、この途方もないロシア全体が、ここ十年来の転変によってどれほどまでに、さまざまな素材に満ちているか、ヨーロッパ人にはとても推し量ることができない。しかし、その素材ときたら——最もちっぽけな個々人の生それぞれの運命、また、家族から軍隊、民族に至るまでの、ありとあらゆる集団の運命。現在のロシア文学は、さまざまな運命、体験、定めといったもののこの過負荷から、民族の身体を解放する、という——こう言ってもいいだろう——生理学的な課題を果たしているところだ。この視点から見ると、現時点でのロシアの文筆活動は、ひとつの巨大な排泄過程なのである。この傾向の規範化は、政治的な意味をもつばかりでなく、衛生学上の意味、治癒的な意味をももっている。つまり、水をいっぱいに吸ったスポンジのように己れの苦悩でいっぱいの人間たちは、あるひとつの傾向という消尽線においてのみ、コミュニズムのもつパースペクティヴのなかでのみ、互いに意思を疎通させることができるのだ。そのかたわらで、転変のなかの生活はたくさんの新しい人間類型、新しい状況を、何にもまして一度は記録され、記述され、評価される必要のある、人間類型や状況を、生み出してきている。

ロシアの現在の著作物は、ある新しい文学の先駆けというよりも、ずっと、ある新しい歴史記述の先駆けなのだ。これらの著作物は、しかしとりわけ、ひとつの道徳的な事実（為されたこと）であるとともに、ロシア革命そのものという道徳的な現象に近づく手掛かりのひとつなのである。》[1]

ベンヤミンの語るロシアの「新しい文学」とは、すなわち「ある新しい歴史記述の先駆け」である。その先駆けとは、すなわち革命に関する歴史記述である。要するに、革命によってもたらされたあらゆる生活面での変化、新しい人間類型、新しい状況についての記述である。その場合、文学者がその記述の担い手であるのは間違いない。単なる記述だけでなく、革命で与えられた使命そのものであった。

そのような歴史の変化、新しい人間類型、新しい状況などに関する記述については、ベンヤミンの講演「生産者としての〈作者〉」（1934）の中で詳しく述べられている[2]。具体的には、革命によってもたらされた文学諸形式の改造過程（様々なジャンルにおいて）、集団形成の禍々しい原理による精神支配、新即物主義（写真やルポルタージュ）などといった文化現象が現れた。

「人民」は、すなわちプロレタリアートの側を代表する崇高な階級である。従って、階級闘争のなかで、文学者が二者択一の決断を迫られた場合、彼らの決断は、階級闘争に基づいて、プロレタリアートの側に立つことによってなされる。そして、文学者は自らの活動の照準を、階級闘争においてプロレタリアートの役に立つ事柄に合わせなければならない。一方、文学の内容や形式は政治的傾向により規定される。政治的な傾向は、たとえそれがどんなに革命的に見えようとも、その作家がみずからの思想に従ってしかプロレタリアートとの連帯を知らず、プロレタリアートとの

連帯を生産者として経験しない限り、反革命的に機能するものであるということになる。

ソビエトにおける芸術の関係設定の定式について、ベンヤミンはそれを「芸術の政治主義」と揶揄した。要するに、すべての芸術は、人民を喜ばせて幸せにするという高貴な使命を持つ。文学者は、プロレタリア革命の諸目的も適合させることをみずからの使命とみなす、そのような技術者になる以外には道がない。その場合、その使命に対し〈知〉を問う内的生活は不可能である。無論、疑問を持つのはもっての外である。なぜなら､「人民」は不変不動の最高価値だからである。

「ロリータ」の作者であるウラジミル・ナボコフの名は知られているが、彼の『ロシア文学講義』の冒頭に掲げられた「18」と番号をふられた無題の一枚の原稿がある。その原稿は、ナボコフがロシア文学講義に先立つ前置きとして語ったソビエト文学概観の部分の唯一の残存する断片である。冒頭にはこう書かれている。

> 国家という名の膨れあがった蛸に導かれる素直な手また手、従順な触手また触手が、あの熱烈な奇抜で自由なもの――文学を、いつのまにか目もあてられぬ代物に変えてしまった。その惨状を眺めていると、皮肉な安堵の心が、蔑みとまじりあった満足感が湧いてくるのをどうすることもできない。そればかりか、私は自分の嫌悪感を宝物のように保存するすべを身につけた。そのような強い感情が、自分にできる範囲内でロシア文学の精神を救い出し、貯えておくことに繋がるからである。[3]

そして、その断片に続く講演「ロシアの作家、検閲官、読者」の中で、ナボコフは次のように語っている。

> 芸術家にとって一つの慰めは、自由な国では案内書（ガイドブック）を作るような強制をされないということである。さて、このささやかな見地からすれば、十九世紀ロシアは奇妙なことには自由な国家であった。書物や作家は禁じられ追放されたかもしれないし、検閲官は悪党や馬鹿者ぞろいだったかもしれないし、頬ひげを生やした皇帝（ツァーリ）は足を踏み鳴らし呶鳴りちらしたかもしれない。だが、ソビエト時代のあのすばらしい発明――全文学界に国家のよしとするものを書かせるというやり方は、旧ロシアにはなかった。[4]

以上、ベンヤミンとナボコフとが語ったソビエトの文学状況をかいつまんで見たが、ベンヤミンの思想の根柢には、ライプニッツのモナド論が投影されている。彼は急進的な革命思想に対し懐疑的であった。一方、ナボコフの文芸観は、国家によって自由を奪われた文学を取り戻そうとした彼の文学精神によるものと思われる。両者の精神は一致している。

文学の精神は、個人の〈自由〉と〈精神〉を根幹とするものである。もしその精神が蔑ろにされた場合、文学はどんな状況に陥るか。そのような状況は、詩人マヤコフスキーの死によって明らかにされた。マヤコフスキーは、十月革命後、二十五歳の若さでソビエト・モスクワ政治委員に選ばれたが、一九三〇年、彼は詩人としての活路を見出せないまま悩んだ末、ピストルで自決した。弱冠三十七歳だった。もう一人、ロシアの傑出した詩人セルゲイ・エセーニン、彼はソビエト時代の詩人でもあるが、革命に憧れて革命政権を謳歌する詩を書いたが、間もなく幻滅する。のちボリシュビキの支配を批判する詩を発表した。晩年は精神的狂乱に陥り、自殺に追い込まれた。弱冠三十歳だった。彼の詩は、スターリン、フルシチョフの政権下に禁書とされた。

彼らの死は、謎のままだったが、ある共通性を抱えたままの謎であった。すなわち、文学は人民に悦びや幸福をもたらすものである以上、文学者は当然ながら至福の喜びを感じる筈だったにも拘らず、彼らはなぜ自決しなければならなかったのか。この問いかけは、ソビエト時代に於いてのみならず、毛沢東時代に於いても迫られるものであった。ちなみに、マヤコフスキーは建国後の中国では権威として見做され、彼の詩は大きな影響を与えたようである[5]。

時代は過ぎ去ったが、疑問が残ったままである。二〇一二年、毛沢東の「文芸講話」（「在延安

文藝座談會上的講話」）が発表されて七〇周年に当たり、五月二十日、北京人民大会堂で中国作家協会主催の座談会「堅持以人民为中心的创作导向」（「人民を中心とした創作方向を堅持する」）が開かれた。席上、作家協会主席鉄凝は、談話を発表したが、その中で「延安文藝座談會から共産党第十七回六中全会に至るまで、人民は依然として中国文学の旗印に刻まれており、中国文学の目指す方向を導きつつある。」[6]と語っている。

この談話の中で党の文芸政策について直接触れてはいないものの、打ち出された中国文学の方向を見ると、依然として「人民」の道徳的社会的観念に隷属させる社会主義リアリズムのような疲弊したイデオロギーを受け流すという印象を払拭できない。どうやらその方向は、確信の上に立てられたようである。再び生産者としての〈作者〉が復活されるかどうかは定かではないが、そもそも中国文学の目指す方向とはどんな方向なのか、「人民」はどうやってその方向を導いていくかについては、未知のままである。では、このような理論は、一体どこから生まれたのか。この問題に答えるには、やはり毛沢東の「文芸講話」（1942）に遡らなければならないが、本稿のテーマにより、これについては別稿に譲ることにする。

二、建国前夜の文学論争

一九四九年、すべての中国人にとって人生における分岐点であったのを否めない。その時点で既に悲劇が走った。建国前夜の文学論争は、実は想像以上の険悪な状況にあって、熾烈な闘いが展開した。一九四八年三月、郭沫若は香港で「斥反動文藝（反革命の文芸を斥け）」[7]という文章を発表したが、冒頭の言葉は次のように始まっている。

> 今日に於いて人民の革命勢力と反人民の反革命勢力とによる真っ向から対決する時代である。是々非々および善悪を判断する基準は非常に明白である。すなわち、人民の解放に有利な革命戦争は、善であり、正当である。そうでなければ、悪であり、非である。革命に対する反動である。今日、われわれは、文芸について語る場合もこの基準に基づいている。いわゆる反動文芸は、すなわち人民の解放戦争に対する不利な作品、傾向および提唱である。大雑把に言えば、二種類がある。ひとつは、封建勢力であり、もう一つはブルジョアジーである。今日の反動勢力――国家独占資本主義は、すなわち封建勢力とブルジョアジーを寄せ集めた集大成である。彼らは全面的武装をして牙まで武装した。文芸は宣伝の利器なので、この方面では既に全面的“撹乱”を動員している。従って、反動文芸の圏内には、多種多様なものがあり、赤、黄、藍、白、黒といったどれもこれも揃っている。

「赤」は、ピンクであり、すなわち作家沈従文を指す。「黄」は、猥褻、封建的な文芸を指す。「藍」は、藍色を党旗とした国民党を名指している。その矛先は、『文学雑誌』編集者、国民党中央監察委員を務めた朱光潜に向けられている。「白」は、ブルジョアジーの作家を指す。「黒」は、即ちブルジョアジーの代表者、蕭乾を指す。これら色分けの作家に対して、郭沫若は、「今日、人民の革命勢力と反人民の勢力が真っ向から対決する時期である。反人民の勢力は、一切合財の御用文芸を動員して全面的“撹乱”をしようとするので、人民の勢力は、当然ながらすべての御用文芸は反動文芸であると非難する権利がある。しかし、われわれは、物事の軽重、主従を分けず、全面的な打撃を行おうとはしない。今日、われわれの主な矛先は、藍色、黒色、ピンク色の“作家”に向けている。」[8]と語った。

これに対し、蕭乾は「J.マサリークの遺書」[9]を執筆して憂慮を示した。この文について、蕭乾夫人文潔若氏は、「丸山昇・蕭乾・文潔若往復書簡」の中で、「〈擬J・瑪薩里克遺書〉は、解放後のチェコに民主的空気を与える為に犠牲になったチェコの外務相の口をかりて、蕭乾自身が1946年に帰国した折の希望、及び世間の誤解を解く努力等を書いています。十分の七は白旗（降伏――引用注）を挙げていますが、最後に自分の見解をはっきり述べています。即ち、世界が両極化に走ることは賛同しない（“不贊成世界走向兩極化”）。」[10]と説明している。

「人民」を後ろ盾に発表された郭沫若のセンセーショナルな文章は、正にベンヤミンの指摘したように、集団形成の禍々しい原理による精神支配そのものであった。この檄文が飛ばされた翌年（1949）の一月、北京大学の壁新聞には郭沫若の「斥反動文藝」の写しが張られた。そして、教学棟には「打倒新月派、現代評論派、第三条路線的沈従文」といった垂れ幕も現れた。当時、北京大学教授だった沈従文は、極度の不安に陥った。彼は香港在住の従兄に送った手紙の中で、「三、四日以内に、過去の怨念で自分は、笑みをもって絞首台に上るかも知れない。」と心境を語った[11]。また妻張兆和宛の手紙にも、子供の将来を考え、自分は犠牲する用意があると心情を吐露した。三月二十八日、沈従文は、遂に灯油を飲んでカミソリで首、手首の数か所を切り、自殺を図った。家族にすぐ発見され、自殺未遂だった。その後、精神病院へ入院治療。同年、北京大学教授を辞したあと、翌年二月、思想改造のため、華北大学での学習生活を始める。その後、華北大学より華北人民革命大学へ転入、思想改造のため政治学習や時事学習をする。当時、四十八歳。一年間の思想改造を終えた沈従文は、断筆宣言はしないものの、再び小説創作の道には戻らず、その後ずっと北京歴史博物館で古代服飾研究の生涯を送った。

ここに、『沈従文全集・集外文存』（北岳文藝出版社、2009）に収録された一九五〇年代に沈従文が書いた思想改造の文章を記しておく。「政治無所不在（至る所に政治あり）」（1949）、「解放一年――学習一年（建国一年――学習一年）」（1950）、「自伝」（1950）、「時事總結（時事総括）」（1950）、「我的分析兼檢討（自己分析および反省）」（1950）、「總結・傳記部分（総括・伝記部分）」（1950）、「總結・思想部分（総括・思想部分）」（1950）、「“三反運動”[12]後的思想檢查（“三反運動”後の思想反省）」（1952）、「交代社會關係（親族関係白状）」（1952）、「沈従文自伝」（1956）、「“反右運動”後的思想檢查（“反右派運動”後の反省）」（1957）、「我」（1958）。

沈従文の思想改造の文章を単なる羅列でここに並べたわけではない。これらの文章は、自然言語が一つもなく、殆ど脅迫観念に近い言葉で書かれている。上記の如く、ダークなイメージを持つ「革命組織」の中で、文学が芽生えるどころか、どんなに個性豊かな持ち主でも簡単に押しつぶされることが判明した。正にナボコフが言うように、「国家という名の膨れあがった蛸に導かれる素直な手また手、従順な触手また触手が、あの熱烈な奇抜で自由なもの――文学を、いつのまにか目もあてられぬ代物に変えてしまった」のである。

沈従文にとって一九四九年は、確かに人生と創作における分岐点であった。それ以降、再び彼の創作する小説が読者の目にまみえることはできなくなった。こうして、中国現代文学史に於いて最も傑出した一人の作家が失われてしまった。ちなみに、沈従文は湖南省湘西苗族の出身で、十六歳から地元の軍隊（湘軍）に参加した。二十一歳、軍隊生活から離れ、一人で北京へ行き、独学しながら小説創作を始めた。湘西は苗族の文化が中心で、歴史上、漢民族との間に熾烈な戦いは何回も展開したが、その文化は滅亡するに至らなかった。作家沈従文は、その好例である。

ソビエトの亡命詩人ヨシフ・ブロツキイは、「私人――ノーベル賞受賞講演」の中で、芸術について溌剌と次のように語っている。「もしも芸術が何かを教えてくれるとすれば（それはまず第一に、芸術家自身に教えてくれるということですが）、それはまさに、人間存在の私的性格でしょう。芸術はもっとも古い――そしてもっとも本来的な意味で――私的活動の形態であるがゆえに、どう転んでも結局、自分が個別で、独自な、二つとない存在であるという感覚を持つように人間を鼓舞し、人間を社会的動物から個人へ変身させるのです。（略）芸術全般、特に文学、そしてとりわけ詩は人間に一対一で話しかけ、仲介者ぬきで人間と直接の関係を結びます。だからこそ芸術全般、特に文学、そしてとりわけ詩は、全人類の幸福を熱烈に擁護する者や、大衆の支配者、歴史的必然の宣伝者たちに嫌われるのです。」[13]、と。ちなみに、ソビエト時代および毛沢東時代では、文学者はいずれも「公人」としての身分しか認められなかった。

二十世紀初頭、人類初のソビエト共産主義社会が現れ、彼らの選択した道は、確かに人類に多くの教訓を残した。毛沢東時代における文学は、実はソビエトの文学の二の舞を踏んでいる。もしく

はそれ以上の悲惨な結果をもたらしたかも知れない。ところで、われわれが知っている文革以降に現れた「新時期」文学は、これまでの官制文化（遵命文学）に対して否定を宣告した。名高い放浪詩人北島は、二〇〇五年四月、ドイツのジャネット・ショーケン（Jeanette Schocken）文学賞を受賞されたが、北島は受賞言葉に、次のように述べている。

> 一九四九年以来、中国国内では、長い間に言論統制が支配的な地位を占めており、これによって現代中国語を硬直化させ、個人の声をも失わせてしまいました。中国人がかつて集団的失語状態に陥った時代もあったが、一九七八年、非政府系の出版物『今天』（謄写版）に詩歌が発表され、言論統制に対して挑戦を挑み、その支配的地位を覆し、再び中国語の魅力を取り戻したのです。[14]

一つの世代は、その世代の文化がなければならない。一九七八年から一九八八年にかけて、中国では爆発的にエネルギッシュな文学が現れ、それは「新時期」と呼ばれる文学である。経済的疲弊、硬直化したイデオロギーの時代の最中から立ち上がった「新時期」文学は、これまでになく官製文化に対して「ノー」と宣告した。文芸評論家ガダマーは、「本当の経験と呼べるものは、常に人間の予想を破る。人間の歴史性は、基本的に積み重なった経験と洞察の関係の中から生まれてくる根本的な否定性である。」と言っている。記念すべき「新時期」文学は、人間性を抑圧した時代を否定し、全く新しい時代を切り開いた。最大の特徴は無数の否定であった。否定こそが「新時期」文学の旗印であると言ってもよい。その間、夥しい小説家や詩人が誕生し、再び中国語の魅力を取り戻し、中国文学の未来に希望をもたらしてくれた。一つの文化、新しい感性が芽生えてきたのである。その現象は、恐らく同時代の世界文学史においても他に類を見ないものであろう。だが、一九八九年六月四日の「天安門事件」により、一つの時代の幕は下ろされた。

以上述べたソビエト時代及び五十年代初期の中国文学の状況について、意味論的思考から考えれば、二つのことが指摘できよう。一つは、強い思考の理想であり、即ち「組織的思考」の統一を切望している。この思考の樹形図は、類と種のヒエラルキー的集合であるのが分かる。すなわち、「種から高次の類への関係は、下位語から上位語への関係である」[15]。もう一つの理想は、世界モデルを構築することを切望している。これについて言えば、五十年代の中国では、ソ連型の社会主義モデルはそのまま真似をした。そのため、権力による革命組織の論理（ヒエラルキーの論理）と世界モデル（社会主義）の構築によって、社会の津々浦々に於いてすべての言論が統制されたわけである。強い思考の理想は、与えられた規則に従って進むことができると過信している。後に触れるが、そこに歴史の誤謬があった。つまり、マルクス主義者ルカーチの言う正しい「歴史の規則」というイデオロギー論に基づいている。第二のタイプの理想は、世界モデルに合わせる必要があるため、思考のあらゆる操作（言語）が行われていた。思考のこうした形式によって、措定された言語モデルを遵守するよう強制される。言語がそのままその構造を反映する世界モデルは、最高の目的としたのである。下記の図１、図２に示されるように、ソビエト時代及び五十年代の中国に於いて謳歌した。しかし、固定観念に囚われたこの二つの理想像は、いずれも節度と限度を知らないまま、引き裂かれた。

図１
（ソ連は我々のモデル）

図２
（我々の目的は共産主義）

（http://www.china.com.cn/ による）

三、祖国へ――作家蕭乾の選択

二〇一〇年の夏、筆者は蕭乾夫人文潔若氏、蕭乾令息一家四人とともに、内モンゴル大学主催の蕭乾生誕百周年記念座談会に出席するため、北京から十三時間も普通列車に乗って内モンゴルへ赴いた。翌日の座談会を終え、内モンゴル大学にある蕭乾文学館を見学した。二〇〇八年設立された蕭乾文学館（二階建て）には、蕭乾の蔵書、文学作品、写真および生前使用品などが所蔵されている。蕭乾文学館は、今のところ、中国では唯一のものである。

蕭乾（1910–1999）は、漢化したモンゴル族の貧しい家庭に生まれ、父親は北京城東直門の番人、蕭乾が生まれる前に亡くなった。母親も蕭乾十一歳の頃亡くなった。その後の蕭乾は、親戚に面倒を見てもらう形で勉強に励み、輔仁大学に入学、のち燕京大学英文科に転学した。燕京大学で、蕭乾は革命家の楊剛女史、有名な国際ジャーナリスト、エドガー・スノーと出会った。そして、ケンブリッジ大学在学中、作家フォースターとの交友関係を結んだ。蕭乾帰国後、その交友関係は悲劇で終わった。

一九五七年、数十万人もの中国知識人は、右派のレッテルが貼られたまま、公的生活から強制労働へと余儀なく追放され、蕭乾もその一人だった。彼は、一九五七年から一九七九年二月まで創作活動が禁じられた。毛沢東時代における言論、文化統制の中で、知識人の政策は厳しかった。とりわけ知識人の地位は、不安定なものであった。時には人民や国家の敵であり、時には団結の対象となったりする。彼らは、まるで社会という建造物の土台を蝕む虫のように看做されていた。要するに、中国知識人は思想改造の対象に過ぎなかった。

では、蕭乾自身は、自分の文学生涯をどう語っているのか。ここで、彼の書いた「ある楽観主義者の独白」（抜粋）を見てみよう。

《この四巻（『蕭乾選集』――引用注）に収録された作品について言うと、一九四九年、自分は北京に戻るとなると、頗る己を知り、それらの文章を古新聞紙で包んで、ひもでしっかりと縛ったあと、人に見られないように屋根の上に吊し上げた。五十年代や六十年代に於いて、自伝の「一部」として二回も提出したことがあった。十年動乱の中、これらの文章も持ち去られ、しかも「毒草」と番号まで付けられていた。八十年代になった今、このように正々堂々と新しい世代の読者の前に現れてきたが、作者としては本当に夢にも思わなかったことだった。更に、この微々たることに関して言えば、われわれの社会は、決して静止的な、硬直したものではなく、革命の領域でも必ずしも鉄筋やコンクリートで固められたものではない。人の運命、本の運命、運命というものはすべて変化がある。従って、悲嘆する理由はない。悲嘆者の場合、嘆息ばかりしているが、それは世の無用なものに対してだけで、世界をちっとも前へと進めることはできない。われわれの社会は、絶え間なく合理的な方向へ向かって進む――この信念こそが、生活の原動力となっている。時には後退、またはレールから離れるかも知れないが、総じていえば、歴史大河のなかで社会は明るい道を目ざして進んでいく。このことについて、私は迷わず固く信じている。

五十年間にわたる自分の創作生涯では、小説創作はたった五年間（1933–1938）しかなかった。その後、自分は小説研究に多くの時間を費やした――単なる研究だけでなく、フォースター、ヴァージニア・ウルフなどのイギリス大家の作品、日記および彼らに関する評論を全部読んだ。

三十年代の初め、自分は学校を出る前に、自ら生活の道を設計した。すなわち、記者という職業を通して文学創作の道を歩もうとしたのだった。五十年間過ぎたあと、振り返ってみると、基本的にこの目標を目指してきた。自分は「古新聞屋」と自称する時、いつも限りなく自慢と感激の気持ちを持っていた。それは、もろもろの職業を通して沢山の友人を作ったことにより、旧い社会で苦難に遭った人々、そして海外生活でファシストの残酷さ、彼らの恥ずべき末路を見たからだった。たった一つ残念なことに、自分には地図

を持たなかったのである。いつも一人で縦横無尽に突進したが、しかも大事な時に迷ったこともあった。私には忘れられない亡くなった友人楊剛がいたが、いざとなる時、彼女が私を迷いの中から導いてくれた。（下線引用者）

一九三九年の秋、私は西ヨーロッパ、北欧で高まる反ソ連の雰囲気の中でイギリスに到着した。当時、彼らは本末転倒で「独ソ友好条約」の調印を戦争の災いのもとと看做していた。そのため、かつてのソ連訪問者も、スペイン内戦に参加した左翼者たちも、新聞で反ソ連の文章を発表するようになった。最も多かった具体的な記事は、三十年代半ばの粛清拡大化に関するものであった。その時から、地上の楽園は、自分の中で影を落とした。

ところが、戦争末期、特にイタリア政局の混迷の中で、自分はソビエトの外交政策が原則よりも実利を求めているのを見て驚いたのだった（当時の私は、背筋を凍らせるヤルタ会議での取引の中身すら知らなかった）。続けざまに、欧州勢力範囲の分割、および東ヨーロッパ終戦初期の一連の出来事が起こった。特に恐怖を覚えたのは、ハンガリーでの大司教に関する連座事件の拡大であった。こうして、三十年代以来憧れてきた地上の楽園は、自分の心の中で動揺し始めた。

当時の自分はというと、地主もなく資本家もなく、何らの搾取もない社会を心から願っていた。もしそのような社会で法制が重んじられ、人が勝手に逮捕されたりしなければ、人心を失すことはないと思った。今から見れば、その頃の考えはそんなに悪くはなかったが、肝心なことは、政権を人民の手に握ってさえすれば、実現可能だろう。もともと地図を持たなかった旅人だったし、祖国から七年間も離れていたので、こうして羅針盤の針は揺れ動き始めた。

一九四九年、私が北京へ帰る選択をしたのは、必ずしも革命に対する認識に基づいたものではなく、むしろその選択は胸中一杯の疑念で決断したのであった。目の前の道は険しいものとは承知しながら、尚且つ危険も感じていたが、あえてその選択をした。というのは、自分が乞食になる運命を恐れていたからであった。——何回も文章の中で、以前の野たれ死にした白系ロシア人から私に残された深い印象について語っているが、自分は当時、乞食にでもなるか、さもなければ、祖国という船に乗って、その運命と共にいるという考えを持った。海の穏やかな時は、船のデッキに凭れて温かい海風を顔に当てる。波風があった場合、波に揺れ、吐き気をし、しかも塩気の海水を飲んでもいいと思った。》[16]

この文章は、蕭乾帰国の動機を知る上で極めて重要である。ここに注目したいのは、蕭乾と友人楊剛のことである。当時、燕京大学英文科学生だった二人は、エドガー・スノーと共に『活的中国』の編集を手伝った。在学中、共産党員の楊剛から、蕭乾に対し何度も革命に参加するよう勧められたが、蕭乾は断った。革命に興味のない彼は、あえて「地図」を持たない旅人の人生を選んだのであった。一九三九年の秋、蕭乾がロンドン大学東方学院講師として赴任するため香港を離れた後、楊剛は蕭乾から『大公報』文芸欄の編集を受け継いだ。第二次大戦後、香港の空港に到着する蕭乾を出迎えたのも楊剛だった。建国後、政府要職に就いた楊剛は、一九五七年十月七日、大量の睡眠薬を呑んでこの世を去った。蕭乾が楊剛の死を知ったのは、ちょうど彼が「右派」のレッテルをはりつけられた煉獄の中に入れられた時のことだった。

文革終息後、蕭乾は『楊剛文集』（1984）を編集して出版した。編集後記の中で、蕭乾は「“她是我一生的几位挚友、益友和畏友之一。”」（私の生涯では数人の知友、益友、畏友がいたが、彼女はその一人であった。）と語っている[17]。楊剛は自殺する前に、上半身にバラ色の絹の綿入れを纏い、下半身に黒ラシャのズボンを穿いた[18]。そのバラ色の綿入れは、四十年代後半にアメリカ留学をした楊剛が帰国する前に、エドガー・スノーの夫人ヘーレン宅に一泊した際、ヘーレンからもらったものであった。一九七九年、蕭乾は米国訪問の際、エドガー・スノー元夫人を訪ね、その話

を聞いたという[19]。

蕭乾と楊剛に注目したい理由は、それだけでなく、実は蕭乾ともう一人の作家との交友関係にもある。その名は、E.M.フォースター（1879–1970）、イギリスの作家である。蕭乾がケンブリッジ大学キングス・カレッジに在学中、フォースターとの交友関係を結んだ。フォースターは、かつて銀行金庫に保管された同性愛題材の小説『モーリス』（*Maurice*）の原稿を取り出して、蕭乾に見せたこともあった。この小説は、死後五十年経ったあと出版すると本人は自ら決めた。蕭乾宛の書簡（1943年１月１日）の中で、「自分の未だに出版されていない小説を、君は何時でも読んでいい。本当は出版してもいいが、何か物足りないところがある。手元に手稿が残っているので、何時でも持っていって読んで下さい。」[20]と述べられている。

第二次大戦中、蕭乾は唯一の中国人記者として欧州戦場を駆け巡ったが、大戦終了後、フォースターは、蕭乾をケンブリッジ大学中国文学科教授として招聘する手紙を、香港にもどった蕭乾に送ったが、断られた。そして、一九四九年三月、ケンブリッジ大学キングス・カレッジ中国文学科主任教授のキュスターヴ・ハルーン氏は、再度、九龍の花墟道にある蕭乾の宅を訪ねた。蕭乾に現代中国文学の講義を受けもつよう招請した。しかも大学側が家族全員の旅費を負担し、終身ポストも約束した。蕭乾は、ケンブリッジ大学の招聘はエドワード・モーガン・フォースターの好意によるものと推察した。彼は色々と考えたあげく、招聘をきっぱり断り、建国前夜の北京へ帰った。

一九五四年、イギリスのある訪中団が北京を訪問したが、その際、フォースターは、蕭乾へ送る手紙を友人である訪中団の団員に託して渡すよう頼んだ。ところが、北京で訪中団を歓迎するレセプションに出席した蕭乾は、その手紙を受け取る勇気がなかった。結局、その手紙は持ちかえされたのであった。フォースターはそれを知ったあと、怒って蕭乾の書簡を全部焼いてしまったという。しかも刊行されたフォースター著作集には蕭乾の名前が一切出ていない。ちなみに、蕭乾の保管したフォースター書簡（百通余り）も、文革中に難から逃れなかった。

物腰のやさしいフォースターは、友を重んじる作家であり、彼は蕭乾より二十歳年上である。フォースターは「私の信条」の中で、「私は、〔……〕主義というのが嫌いで、国家を裏切るか友を裏切るかと迫られたときには、国家を裏切る勇気をもちたいと思う。」[21]と語っている。そのような勇気を持つ作家が社会の中で正々堂々と生きられるのは、本当に幸せである。それは、一人の作家の思想の自由と、社会に生きる権利とを保障されるという意味を持っている。そのような保障がなければ、文学の生存も危うくなる。一九八四年、蕭乾は、再び母校ケンブリッジ大学を訪れる機会があったが、フォースターとは二度と会えなかった。

蕭乾死後、文潔若氏は、故人を偲んで、フォースターの小説『モーリス』（*Maurice*, 1971）を中国語訳し、台湾で出版した。二〇〇九年、上海譯文出版社から再版された。文潔若氏は、「フォースターとの文学上の友情が悲劇で終わったため、蕭乾は終生癒されない痛手を負った。」[22]と語っている。

四、中国の〈オデッセイ〉
———『地図を持たない旅人』

現代の本質は言語革命であり、言語こそ人間の領域である。五十年代、六十年代、七十年代の間、世界文学は著しく成長し、特に六十年代以降、ポストコロニアル文学の台頭で、世界文学に計り知れない影響を及ぼした。ところで、中国では五十年代に数えきれぬ中国知識人は、「右派」のレッテルに張り付けられ、強制労働へと余儀なく追放され、殆どの作家は執筆の権利が奪われてしまった。続けざまに、十年間に亘る文化大革命により大きな災難がもたらされた。多くの作家は、名誉回復後再び創作の筆を執ろうとしたが、既に老境の齢に達しており、かつて黄金のような青春時代が再び戻って来ないのであった。それは、逆に言えば、文学が毛沢東時代では少数派の特権、すなわち上部構造のインテリゲンチャの特権になってしまった社会の悲劇でしかなかった。

文革終息後、巴金は意味深長にこんなことを語っていた。「いまから見れば、相手からアイディアをもらい、自分で創作するという方式は、必ず失敗に決まっている。建国当時、私は四〇歳

になったばかりで、正に壮年に当たり、何かを創作しようとはしたが、うまくいかなかった。こう言ってもいいが、十七年間に於いて私には自分を満足させるような作品が一つも描けなかった。自分も馴染んでいない生活に対し、描けそうもなかったのだ。建国後、茅盾は創作にこそ携わらなかったわけではなく、彼も映画脚本を試みたが、成功しなかった。曹禺の書いた『明朗的天』があまり理想的でなかったのは、みんな知っている通りである。」[23]

文学は、常に「今日」である。『地図を持たない旅人』(初版『未帯地圖的旅人——蕭乾回憶録』、香江出版公司、1988)は、現代中国という不条理の政治世界に生きる人間模様が描かれているが、作者がこの作を人生の全面的真実に迫ろうとする書物として、後世に書き残したに違いない。この作品は、年代記の形で作者の過ごした歳月および同時代の文学の現象が語られ、なかでは記憶と時間の流れが象徴的に写し出されている。ひとつの文学潮流が作品の中からも読みとれると思う。特に毛沢東時代に於いてありとある文学が一つの軌道に乗せられ、無限の多様さを持つ文学潮流が単調になり、それを加速化するエピゴーネンの現象も同時に起こった。そういった「歴史的現象」が作品の底流に流れている。毛沢東時代に於ける生活の探求が難しいというよりは、人々は自己と世界との間に保つ沈黙と恐怖との対峙を優先させている。沈黙は、恐怖政治によって生じたものである。彼らは戦々兢々と歴史の法則に束縛されていて、身動きも取れなかった。生が壊れたとは、歴史の法則に従わざるのではなく、そのドグマとも言うべき歴史の法則によって縛られてしまったからである。画期的な作品『地図を持たない旅人』から、斯くして毛沢東時代の恐怖政治に翻弄された人間模様を我々に垣間見させてくれる。

この作品は、このように叙事詩的悲劇の性格を再現しながら、尚かつ共同体の表象を担う中国現代文学の一断面を語るとともに、必ずしも円かならざる叙事詩的悲劇の性格が消え失せたものではないと物語っている。その意味で、文革中の恐怖政治に翻弄された人間模様を垣間見させてくれるこの作品は、遙かにルカーチの『小説の理論』の美学を超えている。ルカーチは『小説の理論』[24]の中で、歴史は、必ず正しい法則に沿って発展するものと持論を張っているが、歴史がそのように「道具」として用いられるのは、実は「紋切り型」にほかならない。歴史の流れから見れば、そのような法則はあてにもならず、寧ろ破れるものであった。ドグマとも言うべきその「歴史の法則」は、かつて世界に幻想を与えていたが、もしかしたら、これからも幻想を与え続けていくかも知れない。

なお『地図を持たない旅人』には、蕭乾初期小説に於ける「意識の流れ」が晩年創作の悲喜劇精神に富む諷刺手法として生れ変わったといった描写方法を発見できる。つまり、初期小説における瑞々しい「意識の流れ」および晩年創作の奇抜な諷刺手法は、蕭乾文学の底流となっている。その奇抜な手法は、フィールディングの小説、またはジョイスの『ユリシーズ』(中国語訳『尤利西斯』、蕭乾・文潔若訳、譯林出版社、1994)にも影響を受けていると思われる。

蕭乾は「回想録を書き終えた後」の中で、「ひとりの人間の一生は、みな数冊の本に相当する。自分は漸く二冊の本を仕上げた。一冊は、自分の生涯を描く『地図を持たない旅人』、もう一冊は、畢生に於ける文字の仕事に関わる本である。(略)一九七八年以前なら、私が回想録を書くつもりは全くなく、しかも二冊の回想録を書くなんて、全然思ってもいなかった。(略)七十年代の末に再び執筆するようになると、心の中ではまず読者のことを考える必要があるが、梁効のことは絶対忘れてはならないと思った。」(「寫完回憶錄之後」(1992)、『蕭乾文集・第七巻』、浙江省文芸出版社、1998)と述べている。

「梁効」[25]と言えば、文革を体験した人なら、その名前は知っているが、蕭乾がそれを忘れていないのは、知識人にとって「知性」とは何かということに関心を持ったからだと思われる。この問題は、中国知識人を考える上で避けては通れないことであるが、紙幅の関係で別の機会に譲ることにする。ここでは、蕭乾の書いた「ある古参知識人の心境素描」[26](抜粋)について見てみよう。

《私の幼年は、内戦頻発、悪者が蔓延った旧い中国で過ごしていた。貧困、飢餓の経験以

外に、警察隊の獲物に捕われたこともあった。青年期は長い間、戦争に見舞われていて、日本軍の爆弾を免れたが、ヒトラーの爆弾は体験した。中年になると、空が明るくなった。最初の数年間は、大きな波風があったものの、わが身に襲いかかってこなかった。思い出してみると、あの頃ずっと気候風土に合わないものとは思っていたが、おとなしく合わせようとはしなかったのだった。すると、波風がついに自分に向かって降り注いだ。あっという間に私を深淵まで巻き下ろした。

一九七八年、詩人鄒荻帆から、『世界文学』を代表して私に原稿を書くよう要請された。あまりにも突然のことで、自分はどうすればよいか分からなくなった。少し前なら、私は出版社外国文学部門の責任者に手紙を書いて、できれば資料整理などの手伝いをするよう自己推薦したが、何らの返答もなかった。今度は原稿を書く対象となった。いったいどういうことなのか。

情勢が明るい方向へ向かいつつあると自分は判断した。しかし、何を訳せばよいのか、本は全部失われた。机の上に、数日前に潘家洵先生から返された英訳本『ペール・ギュント』を置いてあるだけだった。夜、子供たちが寝ると、私はその机を占拠するようになる。

この芝居は、一九四四年、ロンドンで見たことがあるが、嵐の「文革」を体験したあと、劇中人物に対しては些か詳しく知るようになった。そのため、様々な人物や事柄を思い出せる。「狼の群れが外で吠えているとき、もっとも安全な方法は、狼と一緒に吠えることだ。」という箇所を訳すところに差しかかると、突如、数年前の壁という壁の「大批判欄」が目の前に浮かんでくる。思うに、百年前のイプセンは、恰も今世紀の六十年代、七十年代の中国に合わせて、その芝居を作ったかのようにも思えた。私の訳文はどんなに稚拙でも、原作に対して共鳴を覚えているので、それを訳そうとしたわけである。

ここ数年、私の脳裏には、いつもある思いつきが浮かんでくる。すなわち、もし五〇年代以降、ずっと同じやり方で行い、個人的な思い上がりでなく、実際の問題に着手したならば、今の国の状況はどうなっているだろう！また社会はどのように発展したのだろう！

私はいつも思うが、誤った政策路線によって、自分たちばかりでなく、世界の発展にも揚げ足を引っ張ったのであった。柏各荘国営農場（河北省唐山にある――引用注）の水田、咸寧（文革期に強制労働の場所――引用注）で小麦収穫の時、また自分の子供を前にして吊し上げられたまま、正方形の机に跪いた時、更には体格の立派な連隊長が、弱々しい年寄の編集者に向かって両手で平手打ちをした時――いや、もっと前のことだったが、「三反」（1951年12月から1952年６月まで展開した反汚職・浪費・官僚主義の運動――引用注）、および反胡風運動（すなわち、胡風等数人の反革命グループに対する鎮圧キャンペン――引用注）の時、いつも、三つの「まさか」の疑問が湧いてくるのであった。すなわち、まさかこれが革命ではあるまい？革命とは、まさかこう成らなければならなかったのか？アジア・ラテンアメリカの人民も、まさかこのような道を歩むのか？

人類、或いはすべての生物は、自然本能の趨勢を持っている。すなわち、生活のもっと楽なところを目指すものである。国境の中に自国の人民を留める二つの方法がある。一つは、高い塀を作ってその上に電線を張り、そして機関銃と探照灯を備えつけ、人々を監視するという方法である。もう一つは、国境線のこちら側の生活を豊かにして、余裕のあるものに築き上げるという方法である。そうなったら、人々は外へ逃げるどころか、既に脱出した人も戻ろうと望む。信じ難いことに、前者の道を信じる、しかもそれは信仰に対する忠誠だと自慢するものがいる。ところが、実際は正反対で、薬店の看板に髑髏を書いたようなもので、薬を買いに来る顧客は、それを見たらびっくりして逃げてしまう。

三十年代に於いてスターリンの行った粛清の拡大化によって、西欧の多くの知識人（ジッド、オーデン、イシャーウッド、オーウェル等）を、革命者の陣営から敵対者に回

してしまった。五十年代初めには、第三世界の数億人もの群衆が中国革命に対して厚い期待をかけていた。その頃、私は宣伝を通してそのような情熱を高める仕事に携わったのだった。

一九五七年の夏、私はビルディングの中で吊し上げられたが、善良な人も陰険なものに変わり、誠実な人も真っ赤なウソを言うようになった光景を見て絶望した。反右派運動後、この大地はすっかり冷え込んだ。革命者はおとなしくなり、革命は陰惨なものになり替わったのだった。

ここ数年、私はいつも自分を観察しているが、同時に自分と同じ運命に見舞われた人、とりわけ自分よりもっと冤罪を着せられ、またはもっと苦難に遭った人をも観察していた。みんな期せずに大局を考え、個人の得失ばかりをあまり気にしていない。こっそりと私に向かって、「一九五七年、貴方に対し、私は申し訳ないことをしたが」と謝罪した人もいるが、私は一律にこう答えた。「あなたのせいではない」、と。

傷痕文学と呼ばれている作品が徐々に現れるようになった。その中で描かれた人物たちの運命は私を彷彿とさせるところもあるが、同感せずにはいられなかった。私も何回か自分のことについて書こうとしたことがあるが、原稿用紙に書き出しのスタートをしたこともあった。しかし、自分として、歴史の高い次元に立ってわが身の不運を振り返ることはやはり不可能だったことに気付いたのだ。

長い間（特に「文革」期）、実は自分の頭の中にこびりついていることがあったが、すなわち、知識人と知識人の間の問題である。それは、食うか食われるかの階級闘争のなかで、あえて言えば、一時的に有利な立場に立った少数の知識人は、如何に労働者や農民出身の幹部を利用して、ほかの知識人に迫害を加えろうとしたのかという問題である。この問題については、私の「ある楽観主義者の独白」の中で取り上げたが、すなわち猫とネズミの話だ。

一九四九年の春、私は北京へ帰ることにしたが、自分に対してある断固とした措置をとった。すなわち、海外にいる中国人および外国人の友達に手紙を送って、私が香港を離れたら、再び私に返信をせず、年賀状さえも出さないようお願いした。（一九八五年四月五日、北京遠望樓）》

長々と引用したが、この中に出てくる「猫とネズミ」の話とは、いったいどんな話だろう。「ある楽観主義者の独白」の中でこう書いてある。

《それは水田で除草する時だったと覚えているが、自分はふと、ある「寓話」の草稿を考えていた。題目は「猫とネズミ」、内容はこうだ。周りの世界は、猫でなければネズミだが、一匹の猫は、牙を露出して威嚇していると、周りのある者は、「ちぇっ、ネズミだ!」と大声で叫んだ。すると、その猫は首を引っ込んで、可哀そうにネズミに変貌した。ところが、時には、ネズミは体を揺すぶって鼻息の荒々しい猫に変身することもある。しかも、牙は普通の猫よりも長く、凄まじい声でわめく。自分は猫もネズミもない世界に逃げて、猫でもネズミでもない動物になりたかった。もたもたしているうちに、突然、自分は周りの者から呪われているネズミに変貌した。あちらこちらから唾が私に飛ばされ、甲高い罵声もあれば、雷のような叫び声もあった。自分はしかたなく、そそくさと壇上に上って、実はネズミだと白状したにもかかわらず、壇上から引き下ろされた。ネズミになるのもつらかった。だれでも、ネズミを踏みにじる権利があるのだ。でも、自分もすこし大胆なふりをして、猫の真似をしたことが一回か二回ぐらいあったが、どうもうまくいかなかった。それは自分の躰に生くさいものがこびりついていたからだった。やっぱり、ネズミになるのはほっとする。だが、どうしてもこの猫とネズミの堺は人為的に作られたものだと思っていた。猫になった一部のものが得意になったかも知れなかったが、長い目で見て、また全体的に考えれば、このように仕分けするのも、どうやら帳尻に合わないよう

だ。》[27]

「猫とネズミ」の話は、いわば小動物の眼から見た「さかさまの」人間世界の模様である。この話は、大江健三郎が『小説の方法』[28]の中で触れていた小説家ル・クレジオの小説『調書』(1963）における人間がねずみに変貌する話にも似ている。すなわち、人間がねずみに変貌するという歪形は、想像力の現場で起こり、同時にわれわれ読者もその肉体の生々しい実在感に接している。この実在感は、例えば「猫とネズミ」の話に出てくる牙の露出や荒々しい鼻息など、極度に折り曲げられた姿勢の記述によって「異化」されて、読者に印象づけられている。その手法は、異化によって人間を相対化する方向に、我々の想像力を解き放つ。ちなみに、「猫とネズミ」の話と、ル・クレジオの小説『調書』に出てくる人間がねずみに変貌する話とは手法が似ている面があるが、二つの話は次元が違うものと記しておく必要がある。

沈従文は、かつて自身の『従文自伝』の中で「人間の意志とはどんなものだろう。芸術の象徴的手法とは、すなわち生命の意志ではあるまいか。」[29]と語っている。ここに生命の意志と芸術の表現とが一体となっている。もし生命が脅かされた場合、人間はそれ以外にどんな意志を持ちうるのが可能であろう。「猫とネズミ」の話に出てくる精神的狂乱に陥った人間模様は、正に想像力の現場で滑稽な「笑い」として象徴的に表わされている。

蕭乾を考える場合、革命に対する個人的な信条よりも、目も眩むように翻弄された人生の反転を、彼がどのような目で見ているかということは、遥かに重要である。哲学的に考えれば、蕭乾の人生（文学を含めて）は、転がり出て否定的なイロニーの境地に到達している。この境地は、勿論、「勝利」を意味するものでなく、力の弱い立場に立たされた者が獲得した「弱い思考」をもって、「さかさまの」人間世界、または文学の方法を考えている。その意味で、『地図を持たない旅人』は、正に文学の持つ憐憫の情から生まれた孤独な精神を持つ殆ど壊滅に近い一人の漂泊者の物語である。その中に建国後の中国現代文学の縮図も凝縮されているが、特に考えさせられるのが知識人の問題である。建国後の度重なる政治運動の中で、「革命」という名のもとに、一部の知識人による他の知識人の迫害に手が加えられた問題は、正に知識人にとって「知性」とは何かと問われている。この問題は、本稿の注にもあるように、「梁効」のことにつながっている。

ひとりの男の一生を描いた『地図を持たない旅人』は、イギリスの経済誌 “*Economist*” に掲載された蕭乾訪問記では、「中国の〈オデッセイ〉」と譬えられている[30]。蕭乾の文学生涯に於ける二十二年間に亘る創作活動の禁止、そして波乱万丈の人生を通して、突きつめて言えば、国家と個人とは、どちらが大事なのか、それは一人の人間の自由と権利を保障する社会の真価が問われる根本的な問題でもある。蕭乾は自身の体験を踏まえ、知性を踏み躙る毛沢東時代に抑圧された人間模様の実態を語ってくれたと思う。その中から、人間味のある、機知に富んだ蕭乾という人間像が浮かび上がってくる。芸術的感性の豊かな持ち主であるのは間違いない。回想録『地図を持たない旅人』の中では、ドラマチックな人間模様が描かれているが、紙幅の関係で、詳しい検証は別の機会に譲ることにしたい。

五、蕭乾の批評精神

蕭乾は、晩年に二冊の回想録を書いた。一冊は、生活回想録『地図を持たない旅人』（香江出版公司[香港]、1988）であり、もう一冊は、文学回想録『蕭乾文学回憶録』（台北業強出版社、1991）である。この文学回想録は、蕭乾の批評精神を考える上で極めて重要である。ここでは、それを論じる紙幅が与えられないが、その中に付録として収録された「龍鬚與藍圖――為現代中國辨護」という一文を見てみよう。その中で、蕭乾は中国知識人の心理状態および白話文運動についてこう語っている。白話文運動は自然回帰の文学運動だったが、華麗なる奥深い古典文学に対する反逆であった。分かり易くするために、白話文運動は、形式上に於いて詩歌に対する意図的な簡略化をしており、つまり文学の「民主主義」の道を歩んだのである。言い換えれば、政治上の民主主義思想は白話文に持ち込まれた。従って、白話文運

動を通じて、五四文学運動はマイナスの部分が少なくなかったことも分かる。蕭乾が文中に於いて語っているのは、文学の技巧でもなく生活の遍歴でもない。如何なる眼を以て文学を見るかについてである。現実生活と文学との関係性についても触れている。その中で傑出した作家沈従文を挙げているが、そもそも文学と政治（現実）との関係においてその比重を転倒させることで悲劇が生じる。中国現代作家の直面した最大の問題はそれである。しかもそれは中国現代文学にとって最も不幸であった。一九四九年以降、沈従文は再び文学創作をしなくなった。勿論、それは彼自身の望んだわけではなく、恐怖な政治主義によるものであった。これによって中国に於いて永遠に一人の偉大な作家が失われたのである。かつて思想家ベンヤミンは、このような現象は「芸術の政治主義」だと批判したことがあるが、つまり、芸術を政治的権威に屈服させることである。それは、ベンヤミンがソビエト時代の文学状況について語った言葉であるが、同様に中国現代文学についても適用できると思われる。

蕭乾は、「龍鬚與藍圖」の中で、こうも指摘した。「少なくとも、我々は既にはっきりしてきたことだが、もしも作家は、社会意識による芸術意識の取り替えを許すならば、作家としての生存可能性は狭められるのだ。実際、我々は文学と社会の福音とは区別している。」、と。これらの言葉は、文学者は自由な立場にあり、社会意識に同調すべきではないのを意味している。蕭乾が指摘した社会意識による芸術意識の取り替えは、現代中国に於いて著しく現れた現象であり、しかも周期的に現れ、今日まで続いている。

更に「龍鬚與藍圖」の末尾に、蕭乾は、「民族主義は如何なる重要な文学に於いても主要な特色として現すことがなかった。知識人は、繰り返し世界の人々の間にある兄弟の情の可能性を示した。世界の人々は、作家たちの間では国際的盟約を結ぶのを望んではいないが、我々としては、すべての現代作家がインターナショナルの精神を持つのを希望している。一人の中国人として言えば、我々はなるべく早くこの目標に達しなければならず、我々の想像力を以て人為的な壁を乗り越えて、誠実なる理性を以て気の毒な忠孝を取り替えなければならない。」と語っている。これらの言葉から見れば、蕭乾はナショナリズムではなく、インターナショナルの精神を持つ作家であり、それも彼の辛い文学遍歴の中から得られた経験であるということが分かる。作家はまずナショナリズムを乗り越えて始めてインターナショナルの精神を持ち得る。しかし、このような精神を持つ作家は、毛沢東時代に二十二年間にもわたって執筆禁止を余儀なくされた。それは、世界文学史に於いても稀なことであろう。蕭乾は、自分の心を文学事業に捧げた。彼の文学は、中国にのみならず、世界文学に属している。

「悲劇の中から生き残った人は、一抹の希望を見出したと思う。それはまず我々に教えてくれることだが、作家は生まれつきの正義感を持っており、もしこの正義感に背いたら、心が穏やかでなくなってしまう。実際、それは、精神の発達した人類にとって最も喜ばしいことである。」（「龍鬚與藍圖」）と語られているように、われわれに思想の道しるべを示し、中国現代文学に希望をもたらしてくれたに違いない。すぐれた作家は、どんな状況においても屈服せず、思想を持っている。蕭乾の文芸批評から見れば、八十年代の「新時期」文学が如何に活発であったかも窺われる。

思うに、現代中国の学術思想および文学の発展は、二つの現象が現れている。一つは、理性の夭折と民族主義の台頭、もう一つは、文学思想の後退とナショナリズムの台頭であった。この二つの現象は、一進一退として、それぞれの時代にその特色を現している。総じて言えば、後者は時代の主流となっている。現代中国学術思想および文学の発展について語るならば、この二つの潮流の現象に注目する必要がある。

結びに代えて

作家沈従文は、『従文自伝』（1934）の中で、「私はこの社会の背景を見ると、若い世代に形成された情緒、願望および活力に対して、真正の偉大な思想家の指導と導きが欠けていると思う。多くの若者は活力に溢れているものの、それをどのように発揮すれば良いか分からず、そのあげく、人々は、周期性に近い悲劇の宿命に力が尽きてしま

い、一生を終える運命を免れていない。」[31]と語っている。三十年代に示された沈従文の鋭い観察は、中国社会を考える場合、大きな示唆を与えてくれると思う。毛沢東時代には、正に「周期性に近い悲劇」が次から次と襲いかかった。

文革終息後に現れた「新時期」文学は、世代を問わずある共通性を持っている。すなわち、否定の精神に基づいて時代を見つめている。蕭乾は「巴金と二十世紀」の中で、「巴金が八十年代に世に出した五冊の『随想録』は、現代や当代の文学史に於いて新しい形式を開拓し、新しい方向と内容を示してくれた。つまり、読者に向けて自分の内面世界をあらわにし、自己批判と自己否定を通して、みずからの経験で真実を語るよう呼びかけたのである。」[32]と語っている。巴金の『随想録』は、いわば文学は政治に奉仕すべきものであると自らの信条に対する徹底した反省の上に書かれた懺悔の書である。その中に人間を欺きもする政治の「理想」、または自らの信条に対する幻滅が凝縮されている。そのような徹底した自己否定の精神の持ち主は、果たして中国知識人の中でどのくらいいるだろう。

『随想録』の中で、巴金は「十年間に亘る災難は、決して邯鄲の夢ではなかった。この大きな災難は、全世界の人民にも深く関わっている。残念ながら我々にはダンテ—がいないが、何時か、誰かが新たな『神曲』を書いてくれるだろう。」[33]と、意味深長に述べている。『随想録』および『地図を持たない旅人』、この二つの作品は、「希望の書」として「新時期」文学に刻まれており、不朽の名作として中国現代文学史に残されていく。それは、文革終息後の文学転換期における文学現象の進化と交替の意味合いを持っている。文学が反転する力を持つのはそのような意味合いに於いてである。

周作人はかつて、文学思想の発展は起伏性があり、垂直的ではないと語っている。しかし、世界文学史において中国の文学思想の発展は最も困難であり、中国の知識人は最もつらいものである。晩年の巴金と蕭乾の文学の根底に輝いたのは、知性と批判精神である。二人の作家は死んだ。彼らが残した言葉は死なない。しかも人々に呪われることなく、愛されていく。

注

1 ベンヤミン「ロシアにおける新しい文学」、『ベンヤミン・コレクション５』、浅井健二郎編訳、ちくま学芸文庫、2010

2 ベンヤミン「生産者としての作者」、『ベンヤミン・コレクション５』（前掲）を参照。

3 『ロシア文学講義』、ウラジミル・ナボコフ著、小笠原豊樹訳、TBSブリタニカ、1993

4 ナボコフ「ロシアの作家、検閲官、読者」、『ロシア文学講義』（前掲）

5 『中國文學與蘇聯影響（1956–1960）』（[荷]佛克馬著、季進、聶友軍譯、北京大學出版社、2011）を参照。

6 聯合早報网 http://www.zaobao.com による。

7 郭沫若「斥反動文藝」、『大衆文藝叢刊・第一輯』（香港生活文化書店、1948）に初出、『沈従文研究資料（上）』（天津人民出版社、2006）に所収。

8 郭沫若「斥反動文藝」（前掲）

9 蕭乾「擬J・瑪薩里克遺書」、『観察』第４巻第７期（1948年４月16日）に初出、『蕭乾選集』第３巻、四川人民出版社、1984

10 「丸山昇・蕭乾・文潔若往復書簡」（未公開）による。

11 『沈従文年譜（1902–1988）』、呉世勇編、天津人民出版社、2006

12 「三反運動」とは、1951年10月に全国人民政治協商会議で採択された決定である。つまり、党・政・軍の汚職、浪費、官僚主義に反対して起こされた綱紀粛清運動である。

13 『私人――ノーベル賞受賞講演――』、ヨシフ・ブロツキイ著、沼野充義訳、群像社、1996

14 「訳者解説」より抜粋。「『今天』の過ぎ去りし日々」、趙振先著、顧偉良訳、『弘前学院大学文学部紀要第45号』、2009

15 ウンベルト・エーコ「反ポルフュリオス」（『弱い思考』、ジャンニ・ヴァッティモ、ピエル・アルド・ロヴァッティ編、上村忠男、山田忠影ほか訳、法政大学出版局、2012）を参照。

16 蕭乾「一個楽観主義者的独白」、1982年『当代・第６期』に初出、『蕭乾選集・第１巻』（四川人民出版社、1983）に収録、『人生百味』、中国世界語出版社、1999

17 「楊剛之死」（楊晶）、『読書』（二〇〇九年第一期）

18 「海倫・斯諾如是說」（蕭乾）、『一本褪色的相冊』、蕭乾著、三聯書店香港分店、1985

19 蕭乾「『楊剛文集』編後記」、『楊剛文集』、人民文学出版社、1984

20 「愛・摩・福斯特致蕭乾的信」（李輝譯）、『世界文学』1988年第３期、世界文学編集委員会〔北京〕

21 フォースター「私の信条」、『フォースター評論集』、小野寺健編訳、岩波文庫、1996

22 文潔若「中国人民の友人、蕭乾の知己・丸山昇先生を偲ぶ」（顧偉良訳）、『中国文芸研究会会報第341号』167〜179ページ、中国文芸研究会編、2010

23 「巴金与徐開壘的談話」、原載『文匯』月刊1989年第１期

[24] ジェルジ・ルカーチ『小説の理論』を参照。原田義人／佐々木基訳、ちくま学芸文庫、1994

[25]「梁効」とは、即ち「両校」の意。文革期の北京大学、清華大学の輿論作りグループを指す。イデオローグ的な存在である。蕭乾は「在洋山洋水面前」（代序）という一文の中で、こう述べている。「梁効というものは、六十年代後半期に、突然天から降りてきたものではない。それは以前からマルクス・レーニン主義の旗に隠れて、手や拳をこすって力んで目を見張り、ハイタカのように原野の上空を飛びながら獲物を狙おうとしていた。しかも人民の中で撹乱しようとする。ハイタカは肉食の鳥類であり、梁効も人の背骨を踏み躙って成り上がろうとした。彼らは弁証法的唯物主義の目で物事を見ず、文章全体の意味と論理を理解しようともせず、事前に構えていて、たった片言二言を読み取って棚上げにして、これで完了する。更に彼らは、特製の鎧を身に纏って、いつも傲慢な顔をして、裸にされる人と格闘しようとする、と大言壮語する。」（蕭乾著『海外行踪』、湖南人民出版社、1983）、と。

[26] 蕭乾「一個老知識分子的心境素描」、『現代人』（第一期、1985）に初出、『負笈劍橋・代序』（三聯書店、1987）、『人生百味』（前掲）に収録。

[27] 蕭乾「一個楽観主義者的独白」（前掲）

[28] 大江健三郎『小説の方法』、岩波書店、1994

[29]『従文自伝』、沈従文著、江蘇文芸出版社、1995

[30]「蕭乾年表」（文潔若編）による。『微笑着離去：憶蕭乾先生』、呉小如、文潔若編、遼海出版社、1999

[31]『従文自伝』（前掲）

[32] 蕭乾「巴金与二十世紀」、『蕭乾文集・第五巻』、浙江文芸出版社、1998

[33] 巴金『随想録』、三聯書店、1990

参考文献

『文化の場所』、ホミ・K.バーバ（Homi K. Bhabha）著、本橋哲也ほか訳、法政大学出版局、2012

『蕭乾文集』（全十巻）、浙江文芸出版社、1998

『沈従文年譜1902－1988』、天津人民出版社、2006

『魯迅・文学・歴史』、丸山昇著、汲古書院、2004

＊本稿は、国際学術シンポジウム「現代中国作家の挫折と信念――蕭乾文学とその時代」（2012年10月12日、於弘前学院大学）での発表によるものである。日本学術振興会学術研究基金助成（基礎研究C、研究代表者、研究課題番号：24520404、研究課題名：「中国知識人の挫折と信念――蕭乾文学と思想軌跡をめぐって――」、研究期間：平成24年度、25年度、26年度）の一部である。